東京学芸大学　令和７年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

研究課題	道徳的現実に根差した道徳教育とは何でありうるか――人々の社会的実践に注目して	
氏名 劉　博昊	所属 教育実践創成講座	職名 講師

APRIN e-ラーニングプログラムの受講　☑←受講済の場合はチェックをすること

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

学校における道徳教育では、知識や技能の教授にとどまらず、道徳的に行為可能な主体の育成が目指される。そのため、価値や規範の体系として記述された道徳は、単に疎遠な原理として伝達されるのではなく、それが埋め込まれた社会的実践や実践者の具体的な諸様相とともに、言い換えればリアリティを伴う形で提示されうるかが恒常的な課題である。

本研究では、児童生徒が道徳的主体に成長していくことに資するような、リアリティを伴う道徳教育を設計する具体的な手立てをめぐる教授法やカリキュラム論的な考察に先立ち、そもそも「社会的実践（者）の諸様相」としてのリアリティがいかなる機制の下で、道徳教育に現れる／現れないかについて、現代社会の構造的特徴をも踏まえながら解明することを試みた。そこでは、主にドイツの社会学者 N.ルーマンのシステム論を参照し、道徳とリアリティをそれぞれ彼の個人・社会の動的な相互関係について記述した理論構成に位置づけ直しつつ、両者の関係性を再考することにより、以下のようなことが明らかになった。

すなわち、道徳という認識様式を通して社会的世界を認識する営為は、社会的実践（者）の諸様相を削ぎ落す危険性があること、換言すれば、道徳それ自体がリアリティの現出を制限している＝社会の複雑性を縮減していることである。翻って、リアリティを伴う道徳教育の構築は、ルーマンのシステム論における意味の事象・時間・社会の三次元から織りなされる自他関係の複雑性を教育の営みで回復することが必要である。こうした試みは価値や規範を正面から語っていない面では道徳と無関係に見える一方、それらが実践の中でいかに達成されている／いないか、つまり道徳が実践の中で立ち現れる現場を直視しようと努める面では、まさに「道徳的」とも言える。

以上の考察を論文にまとめて、現在、日本教育学会に投稿し、再審査を受けているところである。

【研究成果発表方法】

リアリティはいかにして道徳教育に現れうるか
―Luhmann の差異理論的システム論による道徳とリアリティの関係の再検討―
劉博昊
『教育学研究』（日本教育学会・投稿中）

※発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに 1 部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。